

第5章 和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査

丹羽佑一

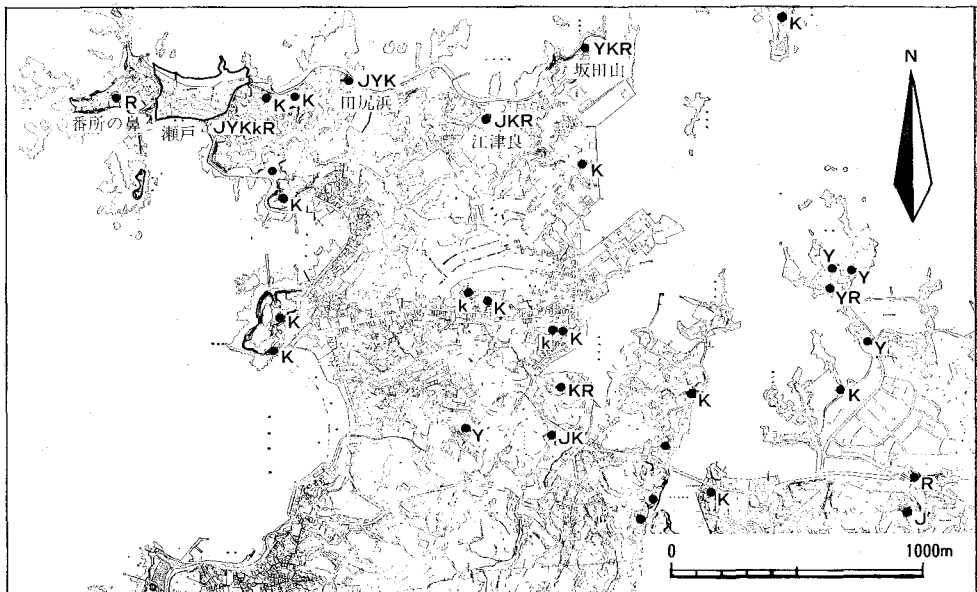
1 遺跡の立地

田辺湾と鉛山湾を南北に仕切る東より延びた岬は、番所山(標高約36m)となって海中に没する(図版10-1, 第22図)。岬は砂州と丘陵からなるが、丘陵はかつて島であり、砂州によって陸繋島となったものである。本遺跡は、この番所山の東に広がっている。当地域の生活の開始は、出土遺物から縄文中期に遡る。

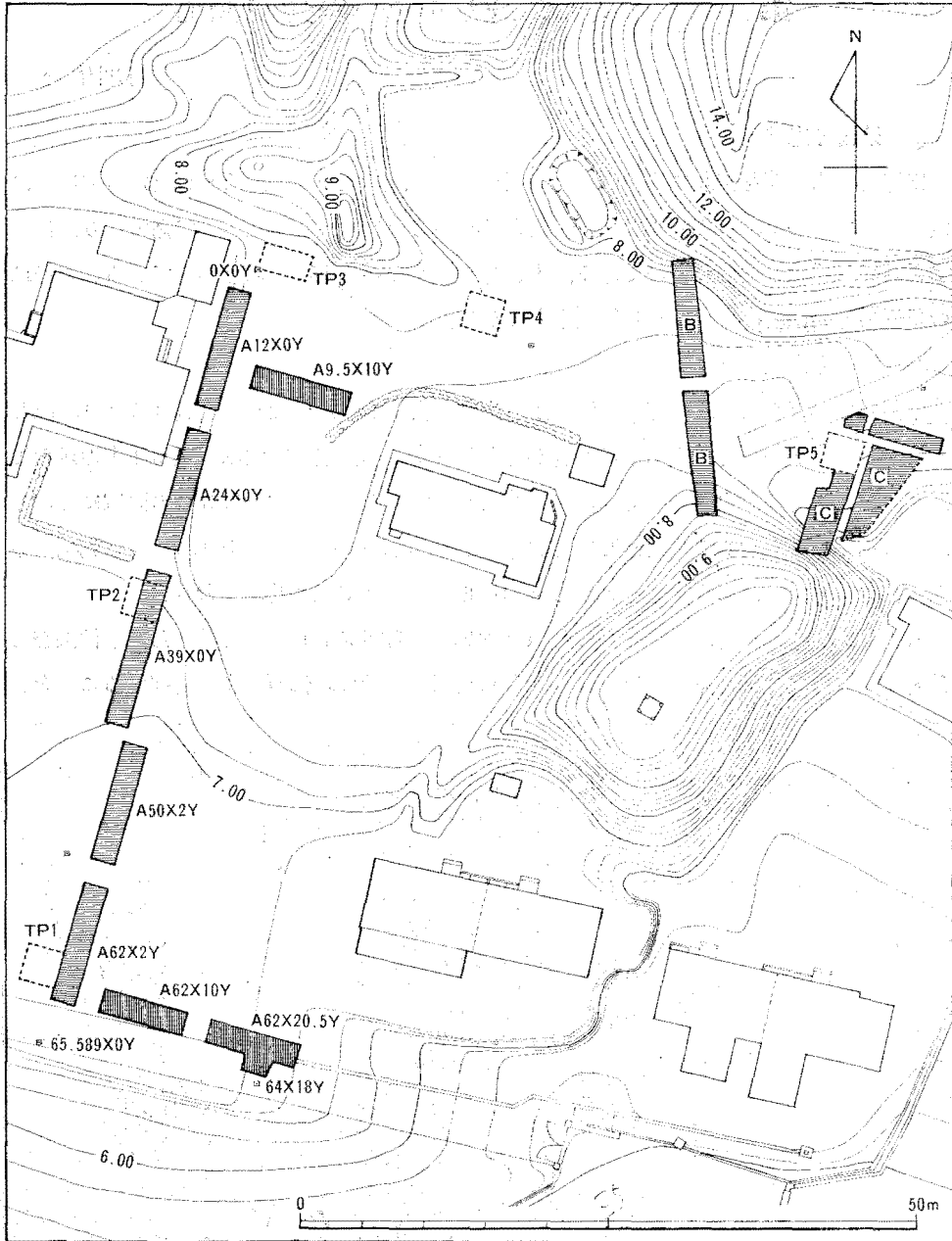
2 調査の方法

本調査は、京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所宿舍新営に伴う事前調査であり、昭和51年9月27日から10月13日に予備調査が行なわれた。本調査の方法は、工事予定地域の地形と、予備調査の成果、調査方法に対応したものである。調査範囲は3つの区域に分けられ、A・B・C3トレンチを設けた(第23図)。割付けは予備調査を踏襲した(同一原点、東西方向をX軸、南北方向をY軸とする2軸からなる座標で調査範囲を覆う)。

Aトレンチ 配管理設予定地に80.5m×2mのL字形トレンチを設けた。予備調査で確認された縄文晩期後葉の遺物包含層の分布状態、以降各時代の層序を把握することを目



第22図 周辺の遺跡 (J : 縄文時代, Y : 弥生時代, K : 古墳時代, k : 古墳, R : 歴史時代)



第23図 調査区域

的とするものである。配管埋設予定地は $Y=0$ 軸に対し若干西にふれるので、Aトレンチ北半の東壁と南半の西壁を $Y=0$ 軸にのせるようにし、南北通しの層序を観察可能にした。また、東西層序の観察、および出土遺物の地点を明確にするために、2m幅の東西壁を基本的には10m毎に設定し、Aトレンチを7つの部分に区分した。各部分をグリッドと呼び、その位置は東南コーナーの座標と、座標における拡がりによって表わした。たとえば、原点から南へ50m、東へ2mのポイントがグリッドの東南コーナーの地点であり、グリッドの範囲が東南コーナーから北へ10m、西へ2mの拡がりを持つ場合、そのグリッドを50X2Y(10×2)と表わした。

Bトレンチ 宿舎建設予定地において、地質構造、縄文時代遺物包含層の分布を把握するために、20m×2mのBトレンチを設けた。本トレンチの方向は、地形を重視したため、座標軸の方向と異なる。

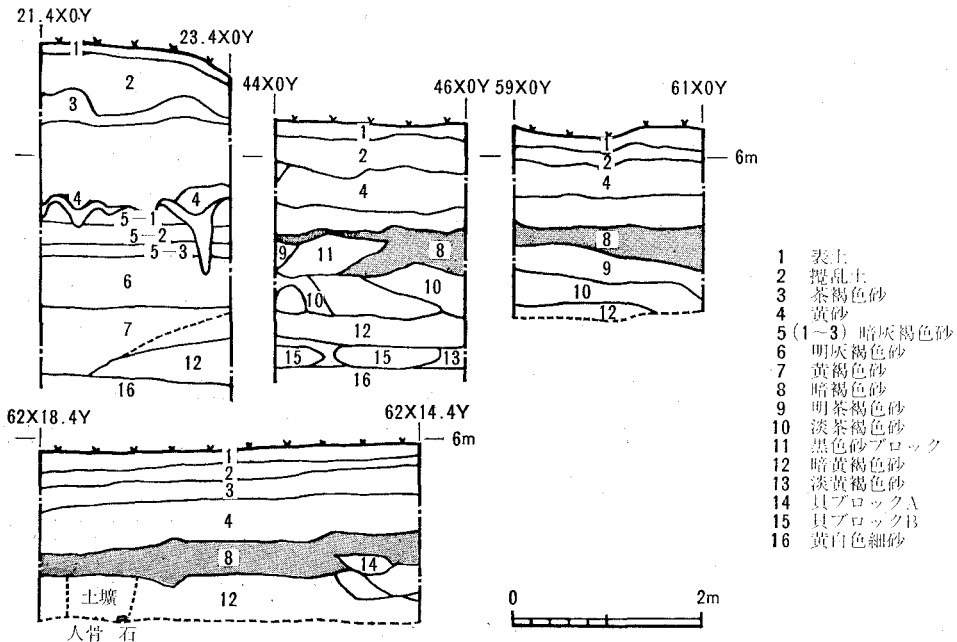
Cトレンチ 宿舎建設予定地東端に、予備調査で検出された水溜りと列石の性格、時期の把握を目的として設けたものである。予備調査のテストピット5を南北、東方に拡大した。座標では10X58Y(13×10)と表わせる。

3 層位

Aトレンチ Aトレンチの基本的層序は、表土、黄砂、暗褐色砂、黄白色砂である(図版11-2, 第24図)。黄砂は、5世紀末から7世紀前半の須恵器片、弥生末・縄文晩期後葉の土器片を含む。暗褐色砂は、縄文晩期後葉の土器片を主体に中葉のものを少量含む。黄白色砂は無遺物層であり、調査の最下部にあたる(海拔4m付近)。

この基本的層序に対し、トレンチ南半において、暗褐色砂と黄白色砂の間に不整合な縄文晩期中・後葉の土器片を含む数層をみるが、暗褐色砂と同一個体の土器片が検出されている。また、トレンチ東南部において黒褐色砂(暗褐色砂に同定される)下部に晩期後葉の貝ブロックが在り(62X20.5Y(2×7.5)西半)、貝ブロック直下の砂層中に人骨が検出された。人骨は貝ブロック直下の層を掘り込んだ土壌内に納められていたものである。50X2Y(10×2)では、縄文晩期後葉砂層下に無遺物層をはさんで、後期後葉の貝ブロックが検出された。

この様な南半の状態に対し、北半においては暗褐色砂が消滅する(22X以北)一方、弥生中期前葉の壺底部(第31図34)を含む黄褐色砂が暗褐色砂上に現われ、またその上に弥生中期後葉の壺口縁部(第31図36)を含む明灰褐色砂の堆積をみる。黄砂においても、北半では須恵器の量が多くなる。

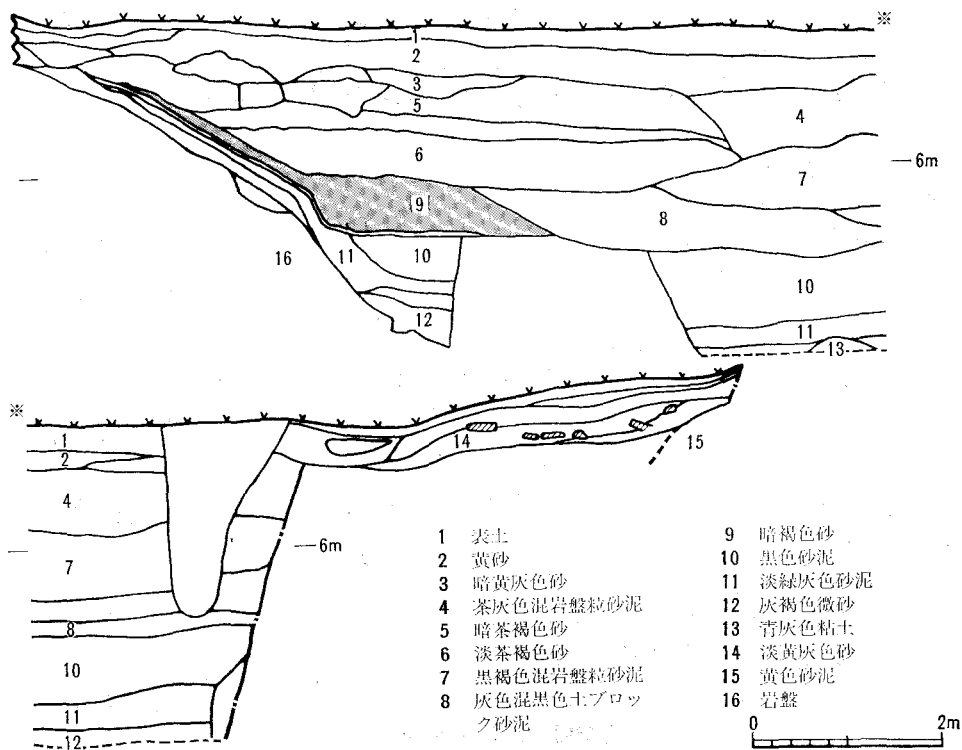


第24図 Aトレンチ層位

以上がAトレンチの層序の概観であるが、縄文層の分布は南半に集中し、貝ブロック、土塊人骨の存在とともに、Aトレンチの堆積状態は、本遺跡における縄文人の生活空間構成を知る良好な資料となった。なお黄白色砂以下を海拔1m付近までボーリング調査したが、微砂、細砂、荒砂が交互に堆積しており、遺物は検出されなかった。

Bトレンチ 本トレンチは、北海岸に臨む小丘と、その南に位置する小丘の間に設定したものである。調査の結果、両小丘を形成する地質が異なっていること(前者は岩盤、後者は黄色砂泥)、両小丘間は、往時谷状地形を呈し、堆積土から低湿地であったことがわかった(図版12-1、第25図)。

この谷状地形堆積土の層序は、表土、黄砂(遺物なし)、茶灰色混岩盤粒砂泥(遺物なし)、暗黄灰色砂、暗茶褐色砂(以上2層、5世紀後半から7世紀中葉の須恵器片、土師器片を含む)、淡茶褐色砂(弥生末の土器片を含む)、黒褐色混岩盤粒砂泥、灰色混黒色土ブロック砂泥(以上2層、遺物なし)、暗褐色砂(縄文後期中葉、晩期後葉の土器片を含む)、黒色砂泥(縄文晩期中葉の土器片と小型打製石斧1点を含む。またヨシ類の根が多量に含まれている)、淡緑灰色砂泥、灰褐色微砂、青灰色粘土(以上3層、遺物なし)、である。最下層青灰色粘土の上面は海拔4m内外を計る。



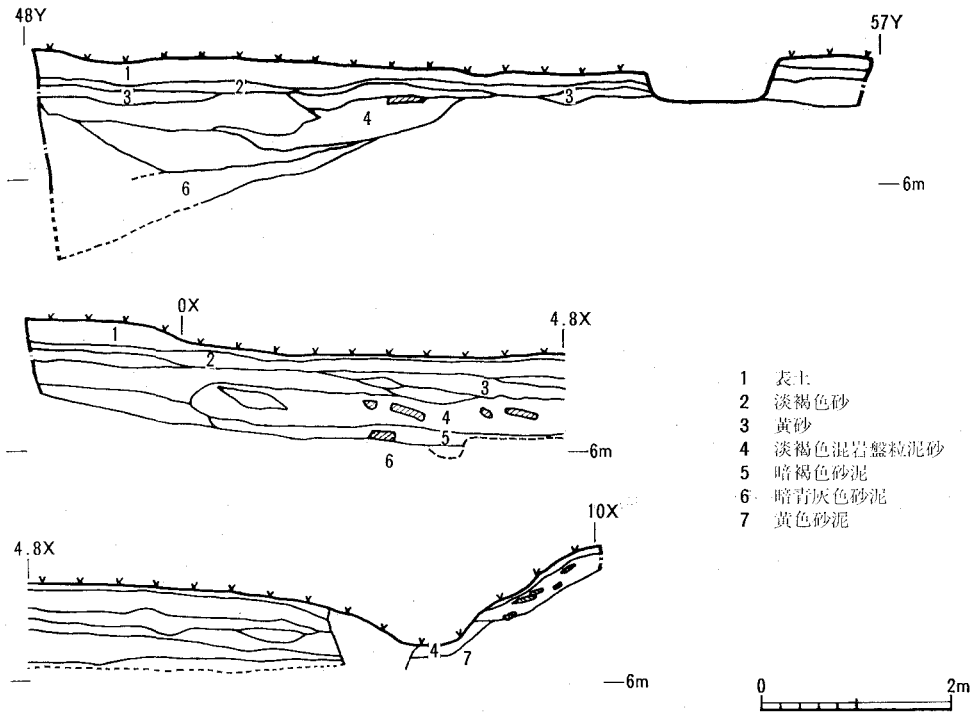
第25図 Bトレンチ層位(東壁)

南小丘に葺石状石群が検出されたが、これは小丘裾部では上記の茶灰色混岩盤粒砂泥上に、上部では黄色砂泥(地山)上の上っていた。石群上には淡黄灰色泥砂が堆積し(この層の分布は小丘上に限られ、上記の層序との関係は不明である)、この層中に5世紀代の土師小甕(第31図VI²⁰)が含まれていた。

Cトレンチ 本トレンチは、Bトレンチの東方に位置するが、調査の結果、上述の両小丘と東から延びる丘陵(岬基部から延びる。現在削平されている)に囲まれた谷状地形の東端部に位置することがわかった。

基本的層序は、表土、淡褐色砂(灯明皿、染付を含む)、黄砂(遺物なし)、淡褐色混岩盤粒泥砂(5世紀中葉の須恵甕(第31図VI¹⁹)1個体の破片を含む)、暗褐色砂泥、暗青灰色砂泥(以上2層、遺物なし)、黄色砂泥(地山)である(第26図)。

予備調査の列石と水溜りは、淡褐色混岩盤粒泥砂中に含まれている石群と、細長い溝状の凹地にできた水溜りを示していることがわかった(図版12-2)。淡褐色混岩盤粒泥砂が堆積した当時、本トレンチ地域には北東から南西にかけて細長い溝状の凹地が形成され



第26図 Cトレンチ層位

ており、その中に淡褐色泥砂と石群が堆積したのである。石群は「土層中に含まれている」という表現が適切であり、据えられたり、並べられたりしたものではない。

南小丘上に、Bトレンチ葺石状石群の東延長部が検出された。石群は地山にのっていた。

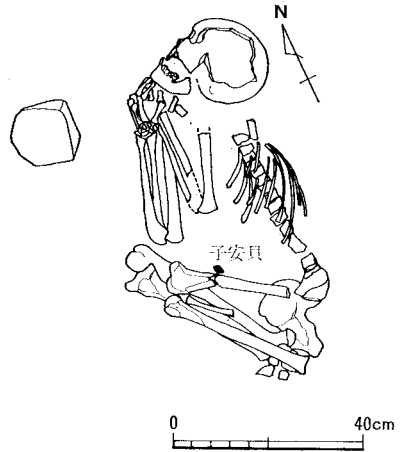
4 遺構

土壇人骨 層序から縄文晩期後葉のものである(62X18Y)(図版11-1・²持, 第24・27図)。人骨は頭を北に、顔面を西に向け、体右側面を下にした「横臥屈葬」の姿勢をとって土壇内に納められていた。京都大学人類学教室の鑑定によると、この人骨は壮年(20~40才)の女性で、上顎左右犬歯、下顎左右中切歯、側切歯に抜歯が認められた。なお、土壇内には床に接して人骨頸部西に1個の塊石と、大腿骨付近に骨より若干浮いた状態で子安貝1個が検出された。

貝塚 縄文後期後葉と晩期後葉の2時期の貝塚が検出された(Aトレンチ南半)(図版11-2, 第24図)。両貝塚は小ブロックが群在したものであり、各ブロックは60cm×80cm×20cm(厚さ)の規模を持つ。その拡がりは、Aトレンチにおける出土範囲から、各時期北西から南東へ円帯状に連なっていたと考えられる。両貝塚の組成をみると、貝類はともに

内湾の岩礁に生息するものであるが、後期後葉では魚類、鳥獣をほとんど含まず、一方晩期後葉では豊富であった。詳細は追って報告の子定である。

葺石状石群 Bトレンチの部分では崩壊した状態であるが、Cトレンチでは基石状の列石が認められた(図版14-1, 第25・26図)。構築時期を直接に示す遺物、層位資料はないが、石群を覆う堆積土中の土師小甕、後述する「水溜りに伴なう石群」に伴出した須恵甕が時間的、空間的間接資料としてあげられる。これら三者に有機的関連が認められれば、一応の時期が提示されよう。



第27図 Aトレンチ出土の人骨

水溜りに伴なう石群 伴出した須恵甕より5世紀中葉のものである(図版12-2, 14-1, 第26図)。石材がトレンチ区域の他の土層に含まれているものと異なること(他の土層のものは風化がはげしい)、伴出した須恵甕の破片は同一個体のものであり、他の遺物は出土しなかったこと、石群の堆積状態は構築の形跡を示すものでないこと、以上から石群は自然堆積によって形成されたものでなく、北東から南西に続く溝状の凹地に投棄されたものと考えられる。

箱式石棺 3基が重複した状態で検出された(Cトレンチ東北隅, 図版14-2)。2基が長軸を北東から南西に、1基が北西から南東にとる。前者が後者に切られていた。上部はすでに削平されていたが、規模の知れるものが2基あり、床面で40cm×100cm, 60cm×(140+α)cmの長方形プランを持つ。大型のものは後者に属する。石材はほとんど抜かれていたが、残存部分では内面を揃えていた。床に石を据えるための掘形は検出されなかった。石材は砂岩が主であった。時期は不明である。

5 遺物

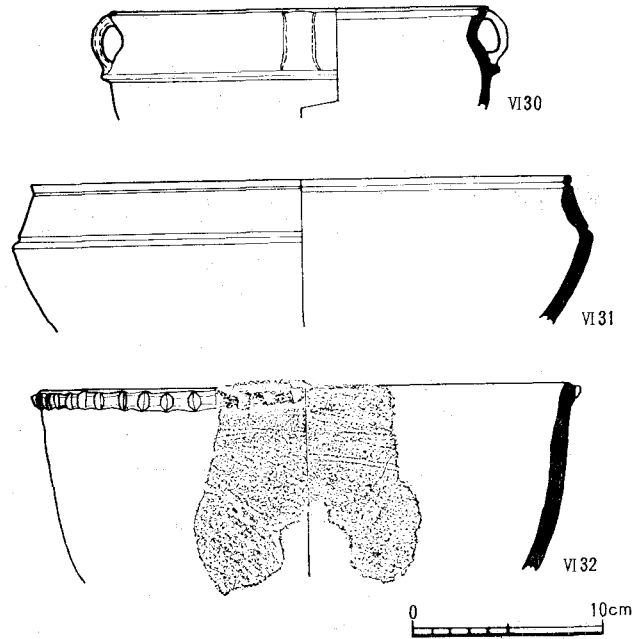
縄文土器 中期前葉(広義の船元式に比定される, VI01), 後期中葉(元住吉山I式に比定される, VI02), 後期後葉(元住吉山II式に比定される, VI03, 宮滝式に比定される, VI04~07), 晩期中葉(滋賀里IIIに並行, VI08~10, VI11は前葉に属するかもしれない), 晩期後葉(滋賀里IV・Vに比定される, VI12~21, VI23~29, VI31~32)に属す土器の出土をみた(第28図)。後期後葉の土器以外は、層位的分類が不可能である。

晩期後葉の土器は、浅鉢形(VI23・31), 壺形(VI13), 深鉢形(VI12・14~21, VI24~29・32)



第28図 縄文土器（中期～晩期）

の各器形がある(第29図)。
 深鉢形土器は無文のものと突帯を持つものに二分されるが、突帯を持つものが大勢をしめる。後者は、突帯、突帯の刻目の有無及び特徴、口縁端部刻目の有無によって、A類(V12)、B類(V14)、C類(V15・16)、D類(V17)、E類(V18)、F類(V19~21・32)、G類(V24~26)に分けられる。量的にはA類とF類が多数を示め、他のグループは少量であった。中でもD・E類は少ない。



第29図 縄文土器(晩期)

A・B類には突帯が1条とわかるものがある。F類には1条のものと2条のものがある。各グループの編年上の位置、セット関係、地域性について現在検討中であり、追って報告の予定である。

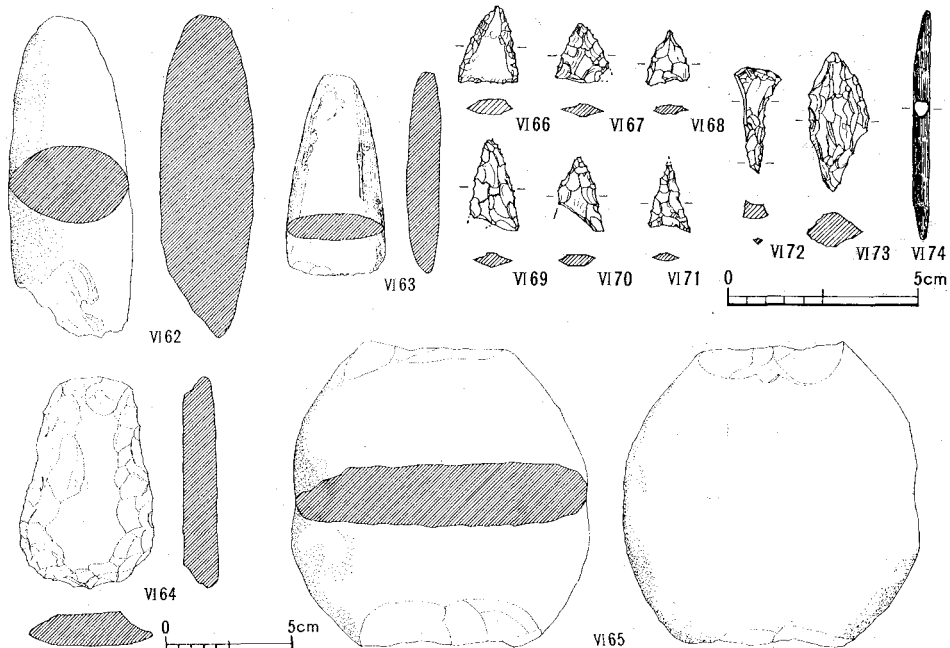
弥生土器 少量出土したにすぎないが、前期から後期まで各時期のものを含む(第31図)。後期末のものが多いことが注目される。調査区域北部に分布の中心がある。

前期末の壺口縁部(調査区域西方図書館北側のテストピットの現代攪乱土より出土、V33)中期前葉の壺底部(V34)、中期後葉の壺口縁部(V36)、後期の壺底部(V35)、後期末の甕底部(V37・38)、目良式土器B類に比定される製塩土器(V53・54)が出土している。

土師器 5世紀の小甕(V52)、脚付鉢の脚部(時期不明、V56)、棒状の底部を持つ製塩土器(V55)が出土している(第31図)。なお、管状土錘2個(V57・58)が出土している。

須恵器 6世紀後葉、7世紀前葉のものを中心として、5世紀中葉から7世紀中葉のものが出土している(第31図)。初期須恵器の出土が注目される。しかし、Cトレンチ以外、各時期のものが同一層で共伴した。

5世紀中葉の甕(V43・44・51)、6世紀前葉(V39)、中葉(V40)、末(V41)の杯身、5世紀末~6世紀初頭(V46)、6世紀前葉(V47)、後半(V48)、7世紀初頭(V49)の杯蓋、7世紀



第30図 縄文時代の石器と骨角器

中葉の高台付杯(VI42)、5世紀末の短脚一段透高杯(VI50)がある。VI51は、胴部外面に比較的細かな平行叩き目を持ち、内面の同心円文が消されている。

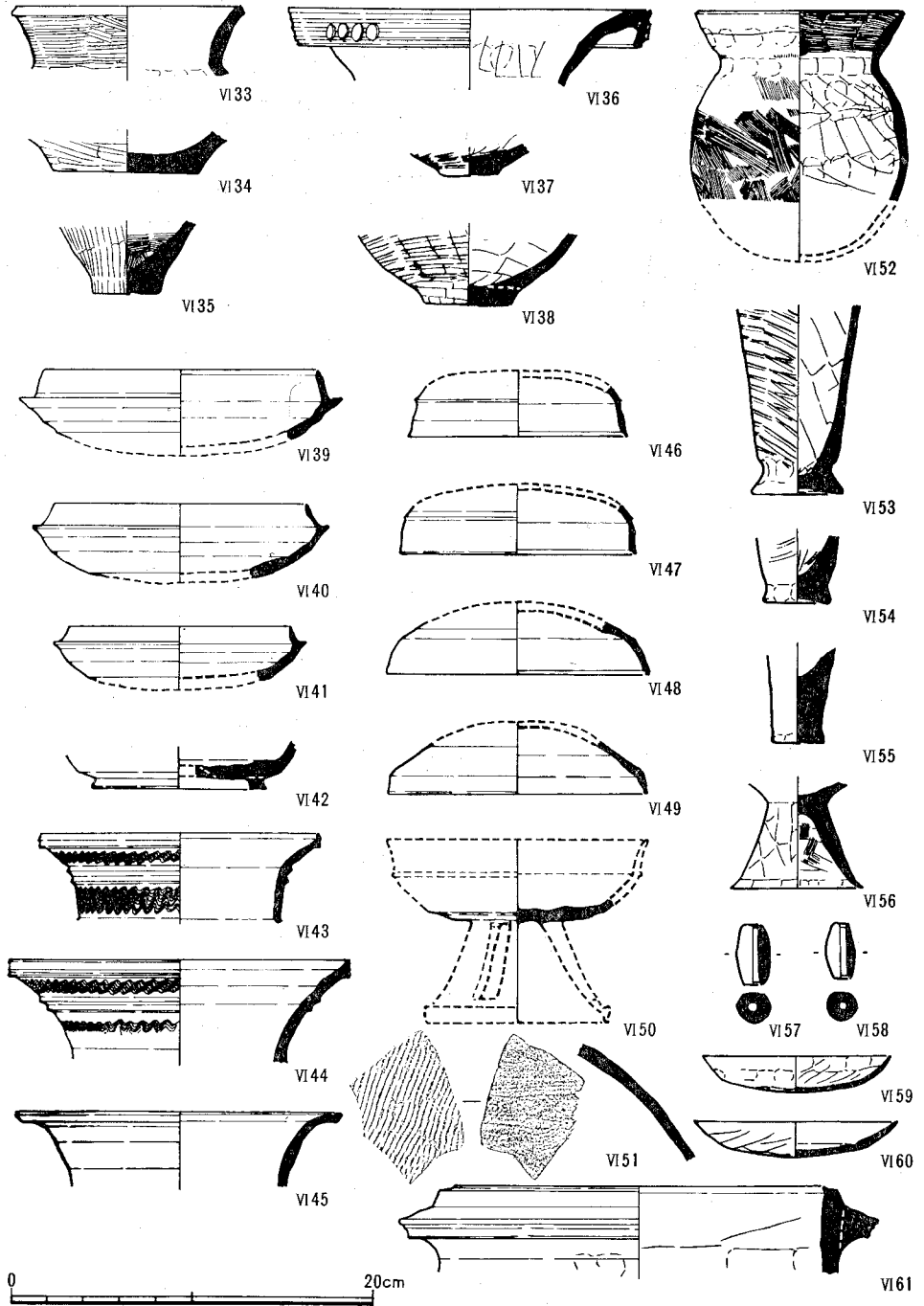
羽釜, 灯明皿, 染付け 平安時代(VI61), 室町時代の羽釜, 江戸時代の灯明皿(VI59・60), 染付けが出土した(第31図)。

石器 石鏃(VI66~71), 石錐(VI72・73), 大型石錘1個(VI65), 大型磨製石斧1個(VI62), 小型磨製石斧1個(VI63), 小型打製石斧1個(VI64)が出土している(第30図)。打製石斧がBトレンチ晩期中葉層から出土しているほかは、すべて晩期後葉層出土である。

骨角器 ビン(VI74)と焼痕のあるイノシシの加工牙が、Aトレンチ晩期後葉層から出土している(第30図)。

6 小 結

以上、本調査の結果を要約したが、その成果は、本遺跡が縄文後・晩期の集落遺跡であることを明らかにした点等、ほぼ調査課題を満足させるものであった。しかし、縄文晩期から弥生前期への移行過程を明らかにする層序資料は得られなかった。縄文晩期後葉の土器の出土は、南紀における土器の内容を豊富にするものであったが、関連資料によって編年上の位置と地域性を明確にしなければならない。また、資料の考古学的、自然科学的分



第31図 弥生時代以降の遺物

析(花粉分析, 地形・地質分析, 貝塚組成の分析, 土器胎土分析)によって, 各時代の本遺跡における人々の活動を明らかにしなければならない。遺跡の立地する空間が, 当時の人々によっていかに利用され, どのように変遷していったのか, この地域的問題を明らかにして初めて各時代の文化の特徴と文化の変遷を把握することができよう。

なお, 本章をまとめるにあたって, 理学部人類学教室池田次郎教授, 和歌山県文化財審議委員巽三郎氏, 和歌山県教育委員会, 和歌山市教育委員会, 紀伊風土記の丘資料館のみなさまの御協力を頂いた。